

1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

1. ルカ

v.21 「八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。」

マリアもヨセフと共に、律法の下にある人でありました。彼らは生まれながらのユダヤ人であって、律法に忠実な人たちでしたから、割礼の日を迎えたとき、幼子をイエスと名付けました。割礼は律法によってアブラハムの子孫に命じられている契約のしるしでありました。彼らは律法の下にある人間として、幼子イエスを迎えました(ガラ 4:4 参照)。

そのマリアが、「時が来れば実現する神の言葉」(ルカ 1:20)を信じて受け入れました。それは律法によっては説明することの不可能な、ただ信じることしか出来ない事柄でありました。ですからルカ福音書は、それが出来事となったときのマリアを次のように描きました。

v.19 「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」

カトリック教会の御聖堂には、昔から聖人やマリアの像が立てられて、絵画やステンドグラスと並んで優れた宗教芸術を形作って来ました。しかし“教会の信仰全体に調和しない信心の誇張や美の絶対化が現れると、典礼を損ない、宗教芸術であっても、典礼には妨げになることが起こる。……この点から充分な吟味が必要である”という土屋吉正神父の言葉は、典礼憲章 125 の警告と共に、私たちが心しなければならぬものです(典礼の刷新 p.447)。

実に御子は、「神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず」(フィリ 2:6)、律法の下にある女から、自らも律法の下に生まれて、この世に受肉されました。マリアはそのような者として“神の母”であり、キリスト・イエスに結ばれて罪と律法の支配下から贖い出されたすべてのキリスト者の交わりの象徴であります。

2. ガラ

神の約束が、イエスキリストへの信仰によって、信じる人々に与えられるようになるために、聖書はすべてのものを罪の支配下に閉じ込めたということ(3:22)を、教会は感謝をもって宣言して来ました。私たち異邦人も、洗礼によってキリストに結ばれる以前は、ユダヤ人と同じく律法の下で監視されていました(3:23)。この罪と律法の支配下にある者を、贖い出して神の子とするために(v.5)御子が受肉されたことを、今年もクリスマスを祝う教会はマリアと共に賛美します。

そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません(3:28)。私たちは皆、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです(3:26)。子であれば、神によって立てられ

た(神の国の)相続人でもあるのです(v.7)。やがて私たちは復活の日に、「婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて」(使 1:14)神を賛美することになります。

3. 民

アロンとその子孫は、イスラエルの人々を祝福する聖なる務めを神から与えられた祭司でありました。彼らは命じられた祝福の言葉を、イスラエルの神の名によって宣言しました。その務めは、代々にわたって続き、主の十字架と復活の時まで続きました。(マコ 15:38、ヘブ 4:14-16, 10:19-20 参照)

こうして祭司の祝福は、いわば「私たちをキリストのもとへ導く養育係」となったのでした(ガラ 3:24-25)。ですから私たちは、毎年この祭日にアロンの祝福の言葉を聞くとき、その祝福が御子の誕生によって歴史の出来事となったことを、そしてさらに再臨のキリストが私たち救われた民を終わりの日に地の果て天の果てから神の国に呼び集めてくださることを、信じて感謝します。

v.27 「彼らがわたしの名をイスラエルの人々の上に置くとき、わたしは彼らを祝福するであろう。」

私たちが聞く聖書のことばが、神の義を立証するものとして(ロマ 3:21)ミサで朗読されるとき、それは神の祝福のことばとなります。主の御顔は、その民である教会に向けられているのです。

ハレルヤ、アーメン。

1月8日 主の公現

イザ 60:1~6 エフェ 3:2~6 マタ 2:1~12

1. マタ

v.2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

私たちの救い主イエス・キリストは、ユダヤ人の王として生まれ、ユダヤ人の王として処刑された方であることを、今日のキリスト者は殆ど全く忘れていないのではないでしょうか。そして自らユダヤ人と自称する民族と彼らの宗教については無関心であって、特にキリスト教や教会にとって何か関係があるなどとは考えただこともないというのが、実状であろうと思われます。

しかし、福音書を生み出した初代教会の信仰にとっては、状況は全く逆でありました。当時のキリスト者たちにとっては、星に導かれて東方から旅して来た占星術の学者たちが、遂にユダヤ人の王としてお生まれになった幼子をベツレヘムで拝むことが出来た物語りは、この方の救いを受けた彼ら自身の喜びの姿の反映として理解されたものと思われます(エフェ 2:11-13 参照)。

東方でもローマでも、またエジプトでも、当時の天文学は既に数十年先の星の動きを正確に計算して予測していました。紀元前7年の春、木星は星空で金星と出会いました。その年の夏と秋には、魚座の中で木星と土星との出会いが繰り返されました。これは極めて稀な大接近で、このようなことは約800年に一度起こるだけです。当時木星は世界の支配者の星とみられ、魚座は終末時代の徴と考えられていました。土星は東方ではパレスチナの星とされていたから、学者たちは占星術的な予測に基づいて旅に出たと考えられます。

初代教会のキリスト者が、イエス・キリストの誕生と生涯と、その死と復活を通して与えられた大いなる救いへの感謝と驚きを、この伝承に重ね合わせたことは自然なことでした。彼らが伝えた「東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった」(v.9)という表現に、私たちが今も得も言われぬ喜びを感じるのはそのためです。

2. エフェ

近代のキリスト教が、キリストの福音の核心である“秘められた計画”に無知かつ無関心になった原因の一つに、“ユダヤ人”という民族を教会とは何の関係もない存在であるかのように思ってしまったという事実があります。「神の子としての身分、栄光、契約、礼拝、約束は彼らのものです。先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです」(ロマ 9:4-5)。それに対して異邦人である私たちは、かつては「キリストと関わりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、……神を知らずに生きていました」(エフェ 2:12)。そんな私たちがユダヤ人と共に「同じ約束に与る者」(v.6)とされたのは、ユダヤ人の王であるイエス・キリストの贖いによってでした。「キリストは、双方を御自分において一

人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として」(エフェ2:15-16)くださいました。

本来ユダヤ人だけのものであった神の国の約束を、今や異邦人である私たちが一緒に受け継ぐ(v.6)という“秘められた計画”を、現代の教会は再発見しなければなりません。ミサを通し、特に主日の朗読配分を通して語られる神のことばに耳を傾けることは、私たちに求められている現下の緊急課題であります。

3. イザ

イスラエルのシャロン首相が去る4日に重度の脳卒中で倒れたというニュースで、世界は今中東和平の先行きに不安の念を抱いています。小泉首相は7日から予定していた中東訪問を急遽中止しました。しかし日本のジャーナリズムがこの報道を取り上げるのは、我が国が石油の8割以上を中東に依存しているという経済的重要性のためであって、イスラエルが決して譲らない“統一エルサレムは、永遠不可分のイスラエルの首都”という主張にいささかでも理解や関心があるからではありません。教会も同様であって、パレスチナの最終地位交渉に取り組むユダヤ人の最大関心事であるエルサレムの回復に、殆ど全く無関心でいます。

しかし、今朝私たちが聞く旧約聖書のテキストは、「主の都、イスラエルの聖なる神のシオン」(イザ60:14)の回復を告げるイザヤの預言の言葉であり、それがユダヤ人の王イエスの誕生によっていよいよ間近になったことを告げるために、今朝の福音書のテキストと組み合わせられているのです。

主の公現の祭日を祝う教会は、その朗読によって“シオンを照らす光に向かい、…… 射出するその輝きに向かって歩む”(v.3)ようにと招かれています。

ですから、今はユダヤ人の大部分はキリストに対して不従順の状態にあるとしても、神の都シオンの回復の約束は、彼らと教会の双方に与えられていて、決して取り消されてはいないのです(ロマ11:28-32 参照)。実に私たちの救い主は、ユダヤ人の王としてお生まれになり、ユダヤ人の王として処刑された十字架と復活の主イエス・キリストであることを再確認して、皆で賛美を捧げましょう。

ハレルヤ、アーメン。

1月15日 年間第2主日

Ⅰサム 3:3～10,19 Ⅰコリ 6:13～20 ヨハ 1:35～42

1. ヨハ

キリストの福音の物語りが洗礼者ヨハネを起点として語られたことは、共観福音書および使徒言行録 10:37 から明かですが、それらよりも後になって書かれたヨハネ福音書は、イエスに対する洗礼者の位置づけを明確にする必要があると考えました。それは当時洗礼者ヨハネを過剰に崇める一派の活動が存在したからです(使 18:25, 19:3 参照)。当初イエスが洗礼者の活動に導かれる形で姿を現したことは事実ですが、しかし彼は洗礼者よりも「先におられた」(1:30)「神の子」(1:34)であって、それに対してヨハネは「荒れ野で叫ぶ声」(1:23)にしか過ぎないと述べました。

それにも関わらずこの洗礼者ヨハネの証しによって、最初の弟子たちは「神の小羊」(v.36)、「メシア」(v.41)に出会い、後に教会の土台である岩となったシモン・ペトロもイエスの所に連れて行かれました。そのように洗礼者の果たした役割は偉大であって、キリストの福音の物語りの中で欠くことの出来ない一部を占めています。洗礼者ヨハネを過剰に崇める誤った道に迷い込むか、それとも洗礼者が証した「神の小羊」に無事に出会って救われるかという道の選択を、ヨハネ福音書を通して現代の私たちも問われているのです。

2. Ⅰコリ

v.15 「あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。」

私たちはよく“カトリックの信仰”とか“カトリック教会の信者”という表現を耳にします。これは本来は“正統的な信仰”、“正統的な教会の信者”という意味なのですが、通俗的には“一つの宗派としてのカトリックに属している”という意味に理解されているようです。このため、ある人の信仰や生活がキリストにつながっているかどうかということの代わりに、その人がカトリックに属しカトリックの教えに沿っているかどうかという判断が優先しています。

しかし、「あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿である」(v.19)のは、その人が洗礼の秘跡によってキリストの体の一部とされているからであって、単に宗派としてのカトリックに形式的に属しているからではないことを忘れてはなりません。

ローマカトリック教会には、教皇を頭とする司教団があり、更にそれらの司教たちに従属する司祭団があって、彼らは教会が根本的にイエス・キリストに依り頼む存在であることを共同体に想起させる働きをしています。ですから、共同体が彼らの奉仕の働きによってキリストの福音を聞き、キリストに属する者、キリストの体の一部となって成長することが大切です。司祭がミサの中でキリストの“代理者”として行動するという説明を、あたかも“だから信者は、司祭を初めとする教導職に聞き従えば、もはや自分で直接キリストに出会い、キリストに聞く必要はない”と誤って解釈する危険を避けることが必要なのです。

1月22日 年間第3主日

ヨナ 3:1~10 Iコリ 7:29~31 マコ 1:14~20

1. マコ

vv.14-15 「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、“時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい”と言われた。」

マルコ福音書が特に使徒ペトロと深い関係にあることはよく知られていることですが、それはこの福音書に用いられている諸伝承とその配列順序が、ペトロを頭とする初代教会の使徒たちの宣教の特質とほぼ一致しているからです。初代教会は最初から宣教する教会でありましたが、言うまでもなく宣教するには福音が必要であり、生きた体験からほとばしり出る信仰的情熱が必要でありました。そのようなわけで私たちは福音書から、初代教会における使徒たちが宣教した福音を聞かされているのです。

使徒たちが宣教した“神の福音”は“神の国の福音”であります。それはイエスに始まる福音ではありますが、しかし決して単なる思い出の福音ではなくて、初代教会を宣教へと駆り立てた“現在の”福音でありました。その宣教の内容は、復活者キリストは生きている者と死んだ者との審判者として神から定められたということと、この方を信じる者は誰でもその名によって罪の赦しが受けられるということでありました(使10:42-43 参照)。

教会が現代に至るまで使徒たちの宣教という土台の上に建てられているのは、彼らが福音の宣教によって御国を受け継ぐ人々を漁る漁師とされた人々であったからです。ですから、彼らは“神の国の福音”から切り離されては使徒ではあり得ず、歴史の教会も彼らの伝えた“神の国の福音”から切り離されては“使徒継承の教会”ではあり得ないことを、私たちは再認識しなければなりません。

2. Iコリ

古来キリスト教の殉教者は、2~3世紀のローマ帝国時代の殉教者と同じく、神の国を待望する終末的信仰によって迫害に対峙した人々でありました。その信仰を支えたものは新約聖書と信条であって、両者は共に使徒的権威の上に立っています。

しかし20世紀の我が国のキリスト教を振り返ってみると、私たちがそこで教えられた福音と信仰は根が浅くて、本来の使徒継承からは浮き上がったものであったと言わざるを得ません。そこにはかつての殉教者のような信仰的確信がなく、聖書を学んでも使徒的権威を重視しないのが学問的に正当であるような風潮が支配的でした。“聖書に書かれていることを文字通りに信じることは、現代人には不可能である”という前提に立つことが常識となり、その対立軸として過激な根本主義的な教派の人々が、聖書の文言をすべて機械的に事実であると主張する非学問的狂信によって、これも使徒継承とは無関係な道を歩んで来ました。

しかし、今朝の主日のミサの朗読配分は、会衆がそこから神のことはを聞くために使徒パウロの手紙のこの部分を定めています。

v.29 「定められた時は迫っています。」

v.31 「この世の有様は過ぎ去るからです。」

この二つの言葉を信じることは、時代錯誤であって、それらは今は無効になった“昔の使徒の考え違い”に過ぎないと主張する人は、「今からは、妻のある人は・・・、泣く人は・・・、喜ぶ人は・・・、物を買う人は・・・、世のことに関わっている人は・・・」という部分から福音を聞き取ることは出来ないでしょう。それは聖書が伝えている“神の国の福音”を拒否することであり、そうであれば聖書から使徒たちの伝えた福音を聞き取ることも不可能になります。

3. ヨナ

預言者ヨナは大いなる都ニネベに行って、40日後に迫った神の審判を予告しました。ヘブライ人のヨナにとって、都ニネベに住む異邦人のような罪人(ロマ 2:15)などは取るに足りない存在に思えました。

しかし予想に反してニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけて「おのおの悪の道を離れ」(v.8)たのです。そして「神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださのをやめられた」(v.10)のでした。

この物語りが、“神の国の福音”を聞かされている私たちの教会のことであるという理解で、今朝の朗読配分は用意されました。全世界の教会の今朝のミサで、その朗読を通して使徒たちの宣教、更にその中で確かに語っておられる天上のキリストの御声に触れることの出来る信者は幸いです。

生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた終末のキリストは、今はまだ“この方を信じる者は誰でもその名によって罪の赦しが受けられる”(使 10:43)キリストであることを感謝しましょう。

ハレルヤ、アーメン。

1月29日 年間第4主日

申 18:15～20 Iコリ 7:32～35 マコ 1:21～28

1. マコ

w.21-22 「イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。」

ここで私たちは、使徒たちが伝えたイエス像の一端に触れることができます。それなりの学問的修練によって律法解釈の専門家となった正規のユダヤ教の教師たちのようにではなく、イエスは神御自身によって遣わされた預言者のような権威を帯びておられることを、人々は驚きをもって承認しました。使徒ペトロは次のように証言しています。「イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです」(使 10:38) と。

人間の姿で現れ、神の国の到来と罪の赦しの福音を宣教し、十字架に死んで復活されたキリストは、神から遣わされた者としての権威を帯びておられることを、福音書は語っているのです。このキリストは、「人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました。」(ヘブ 1:3) そしてやがて「生きている者と死んだ者を裁くために」(II テモ 4:1、使 10:42) 来られる終末の審判者です。

キリスト教を“イエスの教え”のことだと考えている人々は、聖書を通して使徒たちが現代の私たちに証言しているキリストの福音を、まだ理解していないと言わざるを得ません。田舎であるガリラヤ地方の教師たちとは違って、はるかにレベルの高い優秀な教師として、イエスは際だって立派な教えを会堂で語られたというだけの話であれば、それは使徒たちが“どんなことでもして”(Iコリ 9:23) 宣教した福音とはならなかったことでしょう。使徒たちが宣教した福音は、救済史の中の出来事(使 10:37)であって、“神が既に(旧約)聖書の中で預言者を通して約束されていた、御子イエスに関するもの” でありました(ロマ 1:2-3)。

私たちを来るべき怒りから救うために、終末の日に天から来られるキリスト(I テサ 1:10)は、権威ある神であることを、使徒たちはここで証言しているのだと気づく人は幸いです。

2. Iコリ

v.35 「決してあなたがたを束縛するためではなく、品位のある生活をさせて、ひたすら主に仕えさせるためなのです。」

使徒たちとその後継者によって指導されて、初代教会は「基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった」(使 9:31)ので、使徒パウロも「あなたがたは、…… 伝えられた教えの規範を受け入れ、それに心から従うようになり」(ロマ 6:17)と書いています。しかしその“教え”が信者を束縛する戒律や規則として理解されるようになったのは、後の時代になってからのことです。

使徒たちが伝えたキリストの福音は、罪の赦しの出来事の福音、私たちが来るべき怒りから救うためにキリストが再び天から来られる待望の福音でありますから、「人が義とされるのは律法(戒律や規則)の行いによるのではなく、信仰による」(ロマ3:28)と教えられています。

ここで結婚している男女と、そうでない独身者が話題とされているのは、決して優劣や清い清くないの問題ではなくて、“ひたすら主に仕える”という目的のためであることを理解しましょう。そしてこの“目的”は、聖書を通して今も語り続けている使徒たちの宣教に耳を傾けることなしには、決して正しく捉えることが出来ません。現代日本における結婚年令の高齢化や独身男女の増加現象が、聖書やキリストの福音と何の関係もないことは、言うまでもありません。

3. 申

旧約聖書で、預言者とは神がその口に神の言葉を授けられた人でありました。しかしそのような預言者たちの時代は終わったというのが、旧新約両聖書の見解であります。「すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである」(マタ11:13)、「神は、かつて預言者たちによって、……語られたが、この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました」(ヘブ1:2)とあり、イエス御自身自らをヨナ(預言者)に勝る者と言われたことが福音書に記録されています(マタ12:41)。

しかし、預言者の時代が終わったということを誤解して、今や人間がその哲学や思想に基づいて「わたしの命じていないことを、勝手にわたしの名によって語る」(v.20)時代になったと理解してはなりません。そうではなくて、キリストの昇天以来神のことは“御子によって”、“十字架と復活の福音によって”、“神の国の福音によって”語られるようになったのです。使徒たちがそうであったように、現代の教会の教導職も、人間の教えを語るためではなくて、人々をキリストの福音へと招き、人々にキリストの福音を聞かせるために召されているのです。

「生きている者と死んだ者を裁くために」(IIテモ4:1、使10:42)来られる終末の審判者キリストこそが、教会では唯一の「権威ある者」であって、決して人ではないことを知りましょう。

ハレルヤ、アーメン。